

早大
紀念
録

全

特別
44
1919
762



14
1919
762

38- 9469

○紀念録を編むに先づ紀念章と名を冠し、これを
贈答するに由り配布し、此の紀念章の記号
をあらため紀念冊子を必す配布し、此の冊子
紙を綴じしこと、先づこれを編むに先づ
するに由りしこと、先づこれを編むに先づ

○如くしを準備するに先づつたに、一と月計の
二目を廻りするに先づつたに、一と月計の
三目を廻りするに先づつたに、一と月計の
四目を廻りするに先づつたに、一と月計の
五目を廻りするに先づつたに、一と月計の
六目を廻りするに先づつたに、一と月計の
七目を廻りするに先づつたに、一と月計の
八目を廻りするに先づつたに、一と月計の
九目を廻りするに先づつたに、一と月計の
十目を廻りするに先づつたに、一と月計の

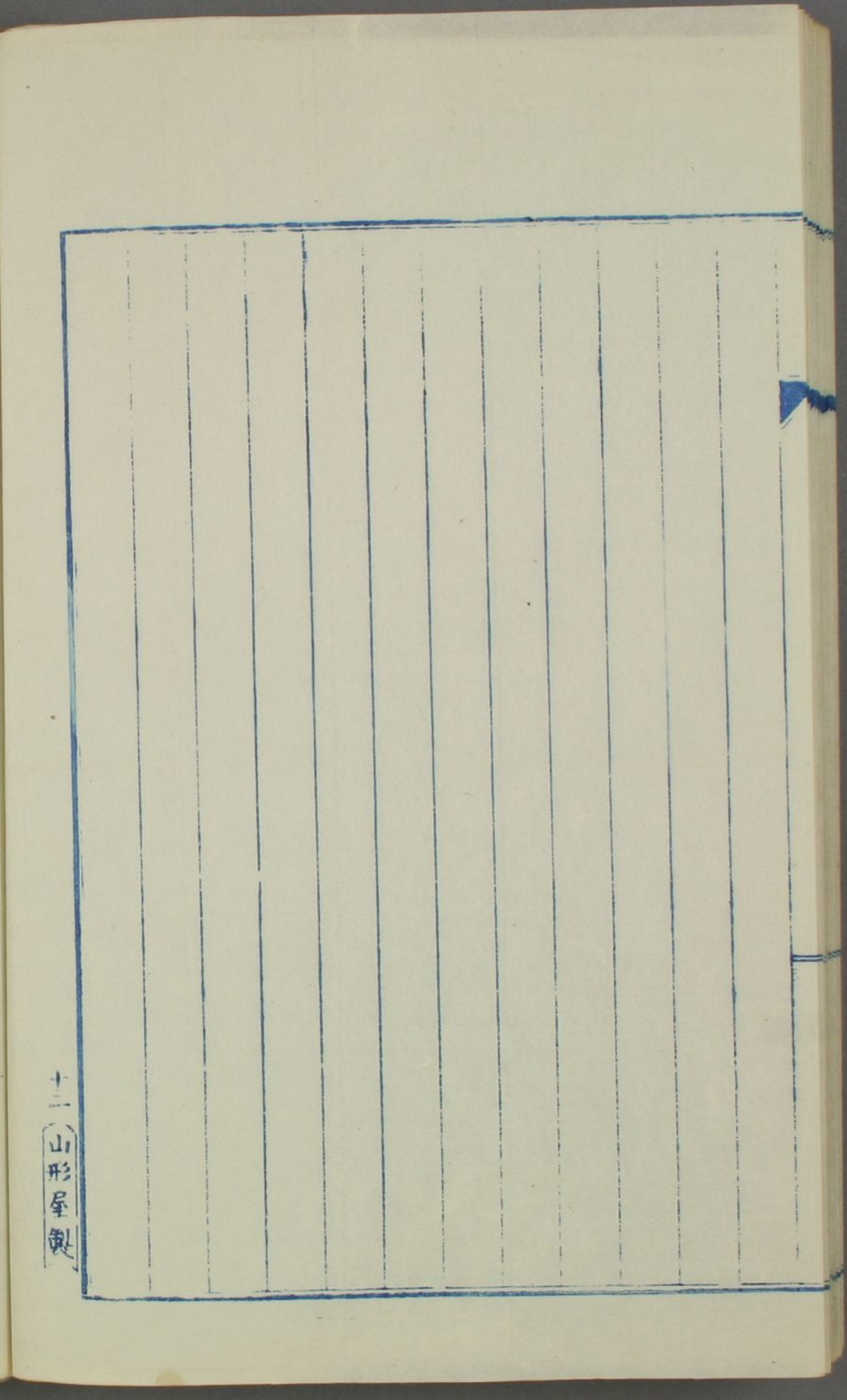
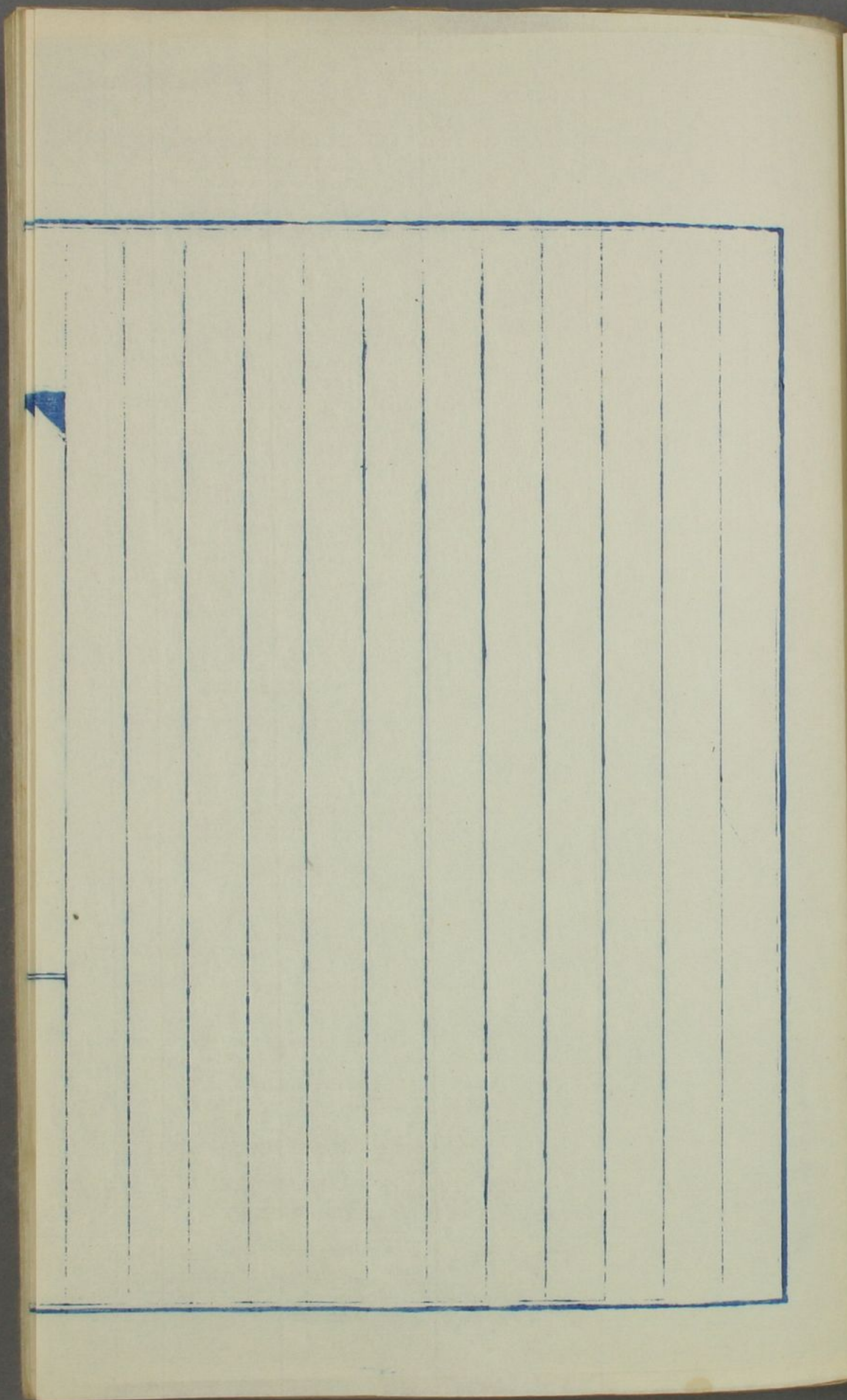
十一目を廻りするに先づつたに、一と月計の
十二目を廻りするに先づつたに、一と月計の
十三目を廻りするに先づつたに、一と月計の
十四目を廻りするに先づつたに、一と月計の
十五目を廻りするに先づつたに、一と月計の
十六目を廻りするに先づつたに、一と月計の
十七目を廻りするに先づつたに、一と月計の
十八目を廻りするに先づつたに、一と月計の
十九目を廻りするに先づつたに、一と月計の
二十目を廻りするに先づつたに、一と月計の

○紀念章の編むに先づ十月念りと月計の
百條上げて十九の月計の
十の月計の
十一の月計の
十二の月計の
十三の月計の
十四の月計の
十五の月計の
十六の月計の
十七の月計の
十八の月計の
十九の月計の
二十の月計の

て書るに欲ししす未回成を言せしる所は社
らあらざる者持を言せしこととておぼしう候はる
後其社より支那と嫁姑と供養せしむる
九の括弧のう現法の上は於て大唱を来と傳へ
丸を言入らしルハットを戴つて出むる言
を言ひたるは行列 舞者も亦未だ衣のめ
を言ひたるは心ときき 角のの中は文
けり 舞あおう さま 中 舞あ
とて 女子たちも 舞あ
あゝの男子も 舞あや 舞あ
角 舞あ 舞あ 舞あ 二人と
舞あしとて 舞あ

○此は舞轉て余と二手持のきく
舞せしとて 舞あ 舞あ 舞あ
一は 舞あ 舞あ 舞あ 舞あ
二は 舞あ 舞あ 舞あ 舞あ
三は 舞あ 舞あ 舞あ 舞あ
四は 舞あ 舞あ 舞あ 舞あ
五は 舞あ 舞あ 舞あ 舞あ
六は 舞あ 舞あ 舞あ 舞あ
七は 舞あ 舞あ 舞あ 舞あ
八は 舞あ 舞あ 舞あ 舞あ
九は 舞あ 舞あ 舞あ 舞あ
十は 舞あ 舞あ 舞あ 舞あ
十一は 舞あ 舞あ 舞あ 舞あ
十二は 舞あ 舞あ 舞あ 舞あ
十三は 舞あ 舞あ 舞あ 舞あ
十四は 舞あ 舞あ 舞あ 舞あ
十五は 舞あ 舞あ 舞あ 舞あ
十六は 舞あ 舞あ 舞あ 舞あ
十七は 舞あ 舞あ 舞あ 舞あ
十八は 舞あ 舞あ 舞あ 舞あ
十九は 舞あ 舞あ 舞あ 舞あ
二十は 舞あ 舞あ 舞あ 舞あ
二十一 舞あ 舞あ 舞あ 舞あ
二十二 舞あ 舞あ 舞あ 舞あ
二十三 舞あ 舞あ 舞あ 舞あ
二十四 舞あ 舞あ 舞あ 舞あ
二十五 舞あ 舞あ 舞あ 舞あ
二十六 舞あ 舞あ 舞あ 舞あ
二十七 舞あ 舞あ 舞あ 舞あ
二十八 舞あ 舞あ 舞あ 舞あ
二十九 舞あ 舞あ 舞あ 舞あ
三十は 舞あ 舞あ 舞あ 舞あ

圖書館の備付にハシ、こゝをみる人の氣味たるは
此々及の事も、こゝを、因り、
有る、油、後、
余のあき、



十二
山形屋敷

以下
4 丁
白紙

早稻田大學開校式
東京專門學校創立廿週年紀念會 順序

- 一 十月十九日零時三十分學生入場 (第一鐘奏樂)
- 一 午後一時來賓講師校友入場 (第二鐘奏樂)
- 一 午後一時十分開會 (第三鐘奏樂)
- 一 開會の辭 校長 鳩山和夫
- 一 報告 學監 高田早苗 (奏樂)
- 一 伯爵大隈重信君演說
- 一 校友總代山澤俊夫君祝詞

來賓祝詞演說

- 一 文部大臣理學博士男爵菊池大麓君
- 一 日本銀行總裁山本達雄君
- 一 文學博士男爵加藤弘之君
- 一 侯爵伊藤博文君

(奏樂)

式後大隈伯爵邸庭園ニ來賓講師校友ヲ招待シ園遊會

ヲ開ク

右終テ午後六時ヨリ學生校友講師一團トナリテ市内
要所ニ提燈行列ヲ爲ス

提燈行列順序

- 一、開校式終ルト同時ニ學生ハ辨當ヲ受取ルベシ
 - 一、辨當ヲ受取タルモノハ直チニ本校運動場ニ往キ其入口ニテ提燈ヲ受取リ豫メ定メタル陣所ニ就キ辨當ヲ喫スベシ
 - 一、午後五時半點火ノ號令ヲ聞キ各自提燈ニ點火シ豫定ノ順序ニヨリ部長組長ノ指揮ノ下ニ發足スベシ
 - 一、順路ハ左ノ如シ
- 馬場下ヨリ九段坂上ニ出デ坂下下リテ小川町通ヨリ萬世橋ニ向ヒ大通リヲ通過シ新橋ヲ渡リ議院前ヨリ外務省前通ヲ經テ櫻田門ヲ入り二重橋外廣場ニ整列萬歲三唱
- 一、途中歡迎準備ヲ爲セルモノニ對シテ萬歲ヲ一唱スベシ
 - 一、二重橋外ニ於テ君が代ノ吹奏ニ連レ校長ノ首唱ニ隨ヒ天皇陛下萬歲日本帝國萬歲ヲ三唱スベシ
- 右終テ隨意解散

提燈行列ニ關スル心得

- 一、提燈行列ニ加ハルモノハ其所屬ノ部外ニ出入スベカラズ
- 一、總テ部長組長ノ指揮ニ隨ヒ進退スベシ
- 一、進行中ハ極メテ嚴肅ヲ旨トシ体面ヲ重ンジ粗暴ノ舉動ヲ爲ササルハ勿論陣列ヲ紊スコアルベカラズ
- 一、進行中ステッキ等提燈以外ノ物品ヲ携帶スベカラズ
- 一、進行中列ヲ離レテ飲食等ヲ爲スベカラズ
- 一、進行中通行人ノ妨害ヲ爲ササル様注意スベシ
- 一、進行中發病シタルモノハ部長組長ニ申出デ後列ニ於ケル

第二陣

高等豫科

(出發ハ學生組長ノ順ニ依ル以下同シ)

部長	金子大尉	學生組長	藤本和三郎
A組長	金子大尉	渡邊保穂	
B全	講師永井一孝	巖谷冬生	
C全	講師吉田良三	宇田川鳳一郎	
D全	平田少尉	朝倉慶友	
E全	講師竹内松治	高橋正	
F全	福田軍曹	鈴木壽	
第三陣	政治經濟部	肥塚麒	
部長	學監 高田早苗	遠山景久	
大學部組長	學監 高田早苗	廣端辰明	
專一全	講師 中村進午		
英政、邦政、二、三全	講師 長田忠一		

學生組長	白川傳吉
邦政二	宮崎清光
邦政三	曾根善一郎
全大政一	東野善一郎
全大政二	山崎貞
全英政三	佐野與實
全英政一	佐藤權大
全英政二	土井權大
全英政三	木村祥造
全英政一	福田須賀
全英政二	栗原須賀

校醫ノ看護ヲ受クベシ
 一、進行中他故障ヲ生ジタルモノハ後列ニ入ルベシ
 一、二重橋前廣場ニ提灯ヲ棄ツベカラズ

出發順序

一、十九日午後五時三十五分第一陣出發
 一、各陣ハ五十間、各組ハ十間ヲ隔テ、進行二人並列トス

- 總長 安部 磯雄
- 第一陣 中學校、實業學校
- | | | | |
|--------|-------|---------|------|
| 中學校部長 | 校長 | 坪内 雄藏先生 | |
| 第一組長 | 增子先生 | 第二組長 | 高田先生 |
| 第三組長 | 中桐先生 | 第四組長 | 守先生 |
| 第五組長 | 草野先生 | 第六組長 | 稻並先生 |
| 第七組長 | 山口先生 | 第八組長 | 岩垂先生 |
| 第九組長 | 矢ヶ部先生 | 第十組長 | 松本先生 |
| 第十一組長 | 大西先生 | 第十二組長 | 兵動先生 |
| 第十三組長 | 川島先生 | 第十四組長 | 原先生 |
| 第十五組長 | 小田内先生 | 第十六組長 | 上原先生 |
| 第十七組長 | 二木先生 | | |
| 第十八組長 | 木先生 | | |
| 實業學校部長 | 校長 | 天野 爲之先生 | |
| 第一組長 | 今井先生 | 第二組長 | 松平先生 |
| 第三組長 | 熊ヶ谷先生 | | |

第四陣 法學部

- | | | | |
|-------|----------|------|---------|
| 部長 講師 | 鈴木喜三郎 | 學生組長 | 渡邊 半平 |
| 大學部組長 | 講師 鈴木喜三郎 | 全 | 高橋 右左二 |
| 專一全 | 講師 小山 温 | 全 | 川口 喜一郎 |
| 專二、三全 | 講師 牧野菊之助 | 全 | 大月 眞輝 |
| | | 全 | 生田 七郎 |
| | | 全 | 秋永 彌高 |
| | | 全 | 久津田 健之助 |
| | | 全 | 泉谷 祐勝 |

第五陣 文學部

- | | | | |
|-------|----------|------|-------------|
| 部長 講師 | 浮田 和民 | 學生組長 | 哲二、三 高橋 良藏 |
| 大學部組長 | 講師 浮田 和民 | 全 | 史二、三 奥田 重政 |
| 專文全 | 講師 波多野精一 | 全 | 國漢二、三 賀集 純三 |
| | | 全 | 國漢二、三 朝倉 良文 |
| | | 全 | 法制一 神戶 次郎 |

第六陣 講師、校友

- | | | |
|-----|-------|-------|
| 部長 | 校長 | 鳩山 和夫 |
| 全組長 | 山澤 俊夫 | |
| | 本田 信教 | |

●●降雨ノ節ハ廿二日夜ニ延期ス

早稻田大學祝典行進歌

(四百餘州ヲ講ニテ歌フ)

煌々五千の炬火は、城西の天を燦き、
 進む二十の秋を、重ねし心地よき、
 今ぞ立ち出づる、早稻田の健兒隊、
 名實備はれり、早稻田の大學と、
 東洋君子の國に、眞個の學徒あり、
 (コレニテ「萬歳」ヲ三呼シテ次ノ句ニツル) 今正に「開」に、
 學の獨立を、屹然標榜し、
 星火天にあり、炬火亦地に満け、
 主義は活動進取、學理と應用と、
 來れ有爲の徒、理想の火を掲げ、
 校氣忽ちに、天下を風靡して、
 いざや聲揚げて、世界に呼號せん、

(「萬歳」ヲ三呼ス)

早稲田大學祝典
行進曲

くわく う ごせんの きくわ はしせ

いの てんをや き ー いま

ぞ たちいづ る わーせだの

けんじ た ー い



大隈伯

早稲田大學創立十二年紀念
東京專門學校創立十二年紀念



早稲田大學風景

早稲田大學開校
東京專門學校創立十二年紀念



池田山正

早稲田大學開校
東京專門學校創立十二年紀念



早稲田大學圖書館

早稲田大學開校
東京專門學校創立十二年紀念

計
 人員 壹千五百十五名
 金員 貳拾五萬四千七百拾九圓拾九錢

但兩名以上組合ヲ以テ寄附セラレタル人員ヲ加フルハ壹千五百五十四名ナリ
 外ニ京都市藤原忠一邸氏ヨリ亡父藤原源作翁ノ遺志ニ依リ永ク金貳萬圓又ハ金貳萬圓以上ヲ本校人材養成ノ元資ニ充テ之レガ利金ヲ寄附スル旨
 甲込マン其目的ヲ以テ既ニ第一銀行ヘ金貳萬圓ヲ預金セラレタリ

○早稲田大學開校式

早稲田大學にて豫定の如く昨日午後一時より開校式を舉行し兼ねて東京專門學校創立二十年祝典を擧げたり來賓ハ大隈伯爵同夫人、菊池文部大臣、伊藤博文前田、黒田、鍋島の各侯爵、榎本、鳥尾の兩樞密顧問、松浦伯爵、英、獨、伊の各國公使、岡部、鍋島、長岡、三島、曾我、酒井、谷、森、千坂、高木(兼寛)加藤、錦織、加藤(弘之)等の各貴族院議員、加藤(高明)神尾、大石大養、杉田(定二)田口、柴等の各代議士千代田、東京府知事、芳野府會議長、穂積博士(陳重)波多野司法總務長官、山本日本銀行總裁、高橋副總裁、小幡篤次郎、三井、安田兩家の人々其他朝野の貴紳各新聞記者及び兩校講師校友學生等を合せ式場に參列せし人々無慮五千餘名にして鳩山校長先づ開會の辭を述べ次で高田學監の報告大隈伯爵の演說校友總代山澤俊夫氏の祝詞あり次で來賓菊池文部大臣、山本日本銀行總裁、加藤伯爵、伊藤侯爵等の祝詞演說あり終て大隈伯爵に於て園遊會を開き午後五時半より提灯行列を催はし行列ハ全員を六隊に分ち

出で夫より順路萬世橋を経て大通りを新橋に下萬歳を三唱して隨意散會したり當日の演說ハ左の如し

△大隈伯爵の演說

回顧すれば今を去ること二十年前東京專門學校を早稲田の片ほとりに創立せし當時に於て世上の狀態ハ如何なりしぞ教育の必要ハ未だ多く世人の認むる所とならず一方にハ又官學獨り旺にして私立學校の如きは世人重きを置かず我輩微力を以て敢て東京專門學校なる一校を設立せんとするに至りし所以のもの蓋し故なきにあらず抑も政府の意思ハ時として國家の意思と相背馳し動もすれば一權力者の爲めに正義を蹂躪されるの恐あり從つて國民教育の如きものも單に之を政府の設立するのみに委する時ハ或ハ恐る國民教育ハ片輪教育となりて遂に國家を毒するに至らんことを是に於てか權勢情實を離れ自由に學問を講じ得る私立學校の必要あり思ふに學問の獨立ハ一國獨立の基礎にして國家生存の最大要件なりとす然る

に當時に於ける官學の狀態ハ如何甲教場に於てハ佛語を以て授業をなし乙教場に於てハ英語により丙教場の獨語によりて教授すると云ふ有様にして學生も亦其受けたる所の原語を崇拜し佛學生ハ英學生と争ひ英學生ハ獨學生と争ふと云ふ有様にして唯に其の學問に統一なきのみならず延てハ一國の獨立を危殆ならしむるに至るハ明なりし抑も言語ハ一國統一の要素なり而して吾人が三千年來祖より受け繼來れる日本語ハ高等なる學問をなすに得ざるや否や若し邦語を以て學問をなし得ずんば即ち止む荷も三千年來熟し來れる邦語豈に泰西の學術を融化し得ざらんや學問の獨立を計らんと欲せば先づ言語の獨立を計らざるべからず是れ東京專門學校創立の精神にして二十年一日の如くに教鞭を取りつゝある高田、天野、坪内三博士の如き當時に於て尙ハ大學々生として研鑽中に在りしが吾人の意思を贊し直に專門學校創立の業に従事され以て今日の盛運を見るに至れり早稲田大學が此三博士の力に待つ所ある頗る大なり尙ハ我輩ハ今日の盛況を目撃して轉た懐舊

の情に堪へざるものありし故小野君に
して君が當時有爲の才を抱いて我輩と意思
を同じくし東京専門學校創立に熱心盡力さ
れたるにも拘らず不幸二重の犯す所となり
て今日の盛況を見るに及ばざりしこと
に遺憾の極と云ふべし我輩の今日の盛況に
際し以上高田、天野、坪内三博士の功勞を
謝すると共に故小野君の功績を數ふるを禁
じ能はぬのである

尙ほ終りに臨み早稻田大學の學問の獨立を
標榜し國家教育の所を補はんことを欲
す雖其費用に至ては尙後尙は世人の寄附
盡力に待つ所頗る大なるものあらん是れ宜
しく來會諸君の諒察を希ふ所である云々

▲伊藤侯爵の演説
早稻田大學の長友大隈伯の創立にかゝり伯
の熱心と職員奮勵の終に今日の隆運を來
せるに依ると雖も亦學校經濟の途宜しきを
得たるに依らずんばあらず今日官民學界
て無用の費を省き有爲の人材を養成せん
苦心するの時にして本校の如き幸ひに其目
的を達したる者と謂ふべし然れども其今日
に至る迄に幾多の困難に遭遇し特に本校

を以て伯が政黨擴張の資に供する者の如く
誤認する者多かりし最も本校の發達に大
なる障害を興へしなるべし併し此事たる
有限者均しく其誣妄なるを知る余の局
外者として公平なる觀地より伯が決して本
校を政黨擴張の資に供せずして教育の神聖
を重んじ超然として政争の外に置かれたる
の斷言するに躊躇せず

次に學問の目的の實用にありて學校の社會
に出で之を活用する能力を養成する所且つ
教育の主眼の之をして偏倚なからしむるに
あるを以て學問に國境なしとの理に依り各
國特殊に發達せる學問を能く取捨選擇して
人材を養成せざるべからず若し之を誤るこ
とあらんか日本の進歩を得て望むべからざ
るのみならず東洋の一隅に偏在せる攘夷的
感念を脱却せざる國民として終るの虞あれ
ば人材養成の任に當らざる諸君の最も注意
せられんことを望む云々

▲加藤文學博士の演説
餘り承からぬ年間に於て四個の公私立大學を
有するに至りし我邦の進歩なるも他邦に
比せば未だ幼稚たらざるを得ず歐洲の往古

より學問の盛なりしも大學なる者の無く僅
に七八百年前伊國に起り次で西蘭、英佛、
獨等に普及したるが乍併其制度たる耶蘇教
僧侶の管掌に歸し居り又學科として神學最
も發達し法醫の二科之に次ぎり理科の如き
の實に最近の發達に屬す而して其學制の各
國各々歴史を異にするを以て獨逸の如きの
哲學なる名目の下に法律經濟等を包含し居
る如きこれなり我國の之に反し其發達近年
なるを以て克く名實相叶ふを見る我邦王朝
時代の大學寮の範を支那に取り我國有の制
度を斟酌したるものにて明經堂、明法堂、
記傳堂、算學堂等あり之が教授を博士と稱し
たる如き恰も今日の大學制度の淵源たる者
の如し次に幕府時代に學問盛大なりしが其
の如し次に幕府時代に異り唯無暗に讀書する
制度の王制時代に異り其後維新となり王朝時代
以て能事したり其後維新となり王朝時代
學制の精神を保持して更に能く發達したる
者なり次に現今の公私立四個大學を以てする
も之を歐米に比する時の未だ甚しき遜色を
免れざるを以て今後大に大學制度の普及を
計ると共に能く其費用に好適する人材の養
成に務めざるべからず云々

▲山本日本銀行總裁の演説

抑も今日の時勢の實業振興の時代にして小
にして一家の經營大にして國力の充實
皆實業作興の力に待たざるべからず然るに
由來實業家なる者の學問と遠かり學者又實
業を輕蔑するの風ありたるが今日の最早學
問なくして正當に實業に従事し得ないの
であつて實業を輕蔑する學者の如きの到底
國家有用の才と云はれぬのである我輩の
關係する日本銀行の如き行員凡そ六百名
計りあるが其二百名は皆學校の卒業生にし
て相當の學問の素養ある者である而して將
來事業界に雄飛せんとする者の學問の外に
品性を養ふ必要があるので其品性の堅忍
不拔の精神と徳義規律を重んずるの觀念で
ある英國の今日ある獨乙の興れる將た米國
の富を極むる皆此品性の然らしめた所であ
る將來我日本の地利を利導して富國強兵を
計るの一に學生諸子の品性の修養に在りと
云ふべきである云々

▲菊池文部大臣の祝詞大要

抑も學校の制や單に之を國家の手にのみ委
すべからず宜しく私立の大學を起し國家の
足らざる所を補ふべき今日の急務とする
所なり大隈伯等風に茲に見るあり去る明治
十五年東京専門學校を創立し爾來今に二十
年數千の卒業生天下に普ねく其學海に貢
獻する所ある知るべきなり今や時勢の進歩
と共に組織を變更し茲に早稻田大學の開校
を見るに至るの欣喜に堪へざるなり一言祝
意を表す

●開校式と牛込區の光景

早稻田大學所
在地なる牛込區民の各戸國旗を掲げて祝意
を表したるが同區神樂坂下に大國旗を交
又し紅白の線を取りたる行燈に「早稻田
開校式、東京専門學校紀念大會」の文字を
記し第二の大國旗交又し矢來町にて第三の
鶴巻町に在り續て同校の學生通用門前に第
四の國旗あり、校門に大綠門を飾り一肅遊
の二字を金文字に菊花を以て記したりき
●提灯行列と我社 午後六時早稻田を發
したる提灯行列の隊伍三千名の健兒は午
後八時頃我社前を通過し我社に向て萬歳を
三呼せり我社の豫て祝意を表せん爲め社前
松田樓との間なる街路上に數百の球燈を列
ね並に「早稻田大學萬歳」の大文字を書した

大行燈を懸け社員社前に整列し學生の一
行なれば能く酒類を供するを避け數樽の湯
茶を備へて之を送迎したり

大隈伯演說大要

(早稻田大學開校式)

早稻田大學開校式と早稻田專門學校紀念祝典とを
擧ぐるに際し一言陳述せんとす抑も本校の成立は
今を距る二十年の昔故小野梓君と余と官の力を假
らずして教育の獨立を圖るが爲め私立專門學校を
創立せんと協議し鳩山博士を始め私立專門學校を
創設せんとし天野、高田、坪内の三博士は小野
氏の紹介に依り初めて余と面會し學校創立に盡力
せんことを約され爾來二十餘年間名刺の外に出
して我々我專門學校の爲め盡力されたる結果遂に
今日の成就を見るに至りしなり唯遺憾なるは小野
梓君は本校の最も困難なる時に際し永眠され今日
の盛況を見ざるの一事なり本校の今日を見るに至
りたるは此の如き二十年來の歴史を有し且つ教員
職員の勵精と全國有志諸君の賛成に由るもの
に今後とも今日に満足せず日進月歩の方針を取り
國家有用の人才を育成するに努むると同時に尙將
來諸君の賛成を仰ぎ益々本校の擴張を計らんこと
を企望に堪へざる所なり云々

伊藤侯演說の大要

(早稻田大學開校式)

當專門學校は我畏友大隈伯閣下の企望に依りて成
立し當校職員の熱心なる盡力に依りて今日の隆盛
を致したるは今更言ふも迄もなけれども予は其學校
經濟の措置が宜しきを得たるの結果なりと信ず政
治社會の上於ても無用の費用を省き必要なる點に
向て之を使用するは頗る必要なることを認む
本校の如きは二十年間全く官費を仰がずして艱難
に堪へ改良を加へて今日に至りたるを以て經濟の

ヨンは甚だ取らざる所なり學問は世界の學問にし
て我國の事のみ止まらず彼此相扶け開明の諸國
と相提携して世界の文明に貢獻するを要し若し支
那流の思想を以て學問上の擴充を爲すに於ては其
損害蓋し尠ならずべしと信ず云々

基礎甚だ鞏固なりしを見るべし之に付ては伯の出
資も多かりしなるべく他の出資も亦尠からざるこ
とならんが職員諸氏の最も苦心せられたるは蓋し
經濟の單なる營業的に流れざりしは今日の私立學校中
稀に見る所にして教育家の少しく考ふべき所なる
べし世往々にして此校は政黨擴張の目的を以て創
立せられたる者なりと稱するも之れ伯の意思を誤
認したる者にして其然らざりしことは既往の歴史
より局外者たる予が之を公言せざるべからずして
又今後大學組織を爲すに付ても祝意を表するに躊
躇せざるべし尙淺學を顧みず一言せんに專門の學
は即ち終身の學にして學校は只其端緒を開くに過
ぎず學校に於て學ぶ所は之を實地の上にて得るもの
少からずして學校は只學問講究の方法を授くるもの
なり故に數年間の短日月に於て學問講究の方法を修
得するに勉めざる可らず又教育は偏倚すれば危險
なりとの説あれども之は政治法律等の社會上に於
ては偏倚すれば危險なりと爲すものにして科學に於
ては即ち偏倚せざるを得ず然れども學校を卒業し
社會に出で、働をなすに於て日本、如きは學力を
外に擴充するの機關乏しく我青年は歐米の青年
に比し此點に於ては不便の事情なきに非ず之を要
するに學校の要は有用の人物たる資格を造らしむ
るにありて專門の攻究に普通の學方を缺かしめざ
るの一事是れなり大學は所謂ユニベルシティにし
て單に專門の學を爲すと云ふに止まらず學理の淵
奥を極むるを要し當校の如きも現在は政治經濟文
學の三科なれども終に之をユニベルシティなるもの
と爲さざるべからず又學問には國境即ちナショナル
ナルバンドなきものにして所謂ナショナルセルシ

稟告校友諸君

一十九日式後大隈伯爵邸ノ園遊會ニ臨ミ午後五時半迄ニ大講堂内階
下休憩室ニ集合シ提灯ニ點火シ第六陣講師校友ノ列ニ加ハルコト
一二十日午後五時帝國ホテル校友大會開會ニ付出席者ハ直チニ此係
ノ者ニ其旨申聞ノコト(會費二圓五十錢)
一二十一日午後五時芝紅葉館ニ於テ今回特ニ地方ヨリ上京ノ校友諸
氏ヲ學校ヨリ招待ノ由ニ付キ在京校友諸氏ハ精々臨席セラレ度事
(會費二圓五十錢)出席ノ有無直チニ此係ノ者ニ申聞ノコト
地方ヨリ上京校友諸氏ハ紅葉館ノ會合ニ出席ノ有無共直チニ此係
ニ申聞ノコト
一今回ノ式典ニ關スル校友會寄附金此際釀出ヲ乞フ
一二十日二十一日兩日午後一時ヨリ校内ニ校友紀念學術大演說會ヲ
開ク演說者左ノ諸氏

二十日

有 天 鳩
賀 野 山
長 爲 和
雄 之 夫

學生諸君ニ告ク

地租改正ノ方法
經濟志想ノ養成
十三年前ノ寄宿生

選舉法ニ就テノ所感
全國入學者ノ一便法

二十一日

忍耐ト成効

古今東西人情同一意

私法上ヨリ兌換券ノ性質ヲ論ズ

早稻田ノ廿年

早稻田大學ノ本領

單一稅ノ利害如何

鈴木喜三郎
齋藤和太郎
森田勇次郎
宮川鐵次郎
野間五造
匹田銳吉
西川太次郎
圓城寺清

高田早苗
村上專精
今村信行
土子金四郎
志田鉀太郎
小山溫
黒川九馬
田川大吉郎
牧内元太郎

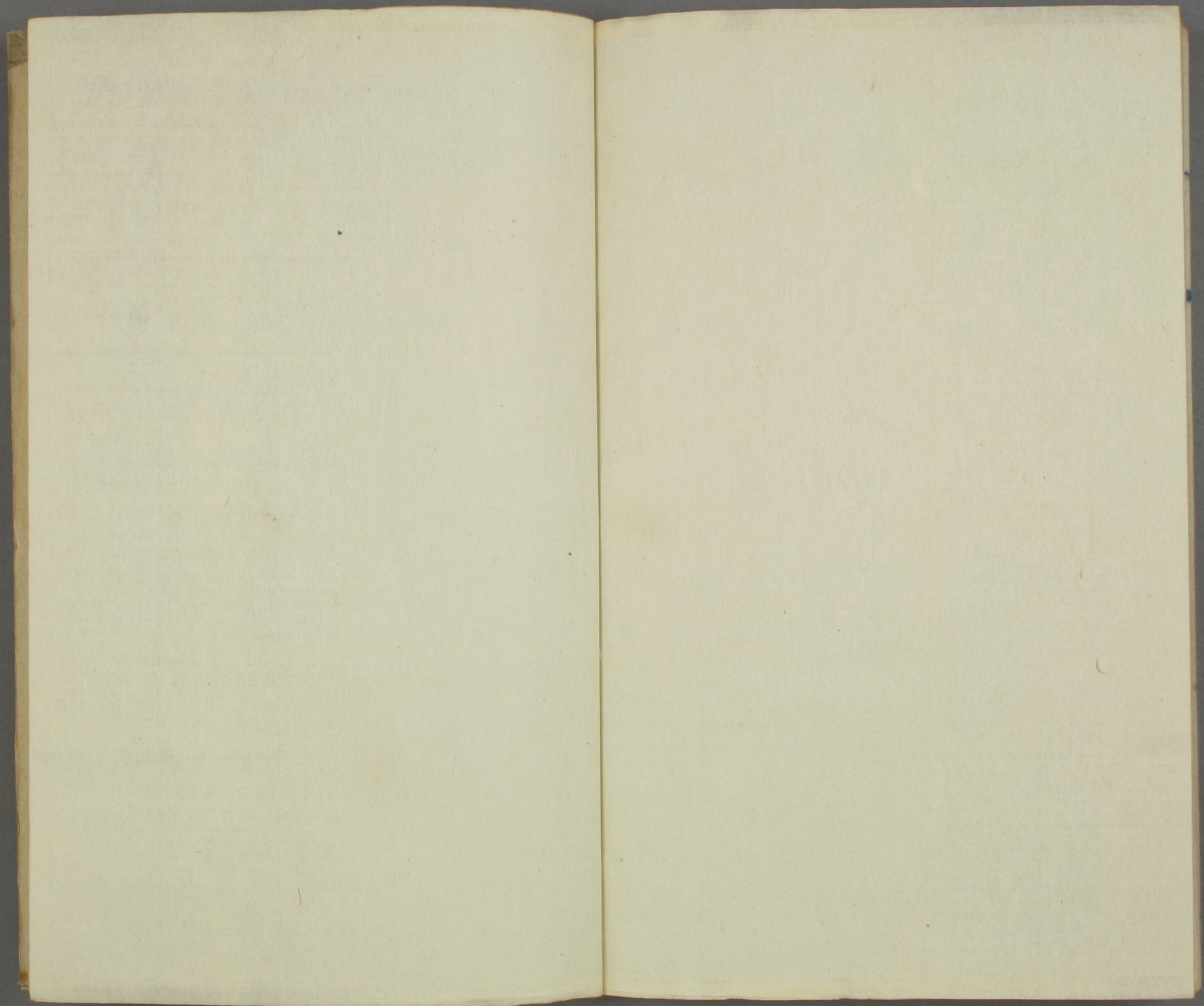
鳥谷部銑太郎
増田義一

右爲念再應申進候也

十月十九日

早稻田大學校友會幹事

經濟界ヨリ觀タル早稻田大學



以下全て

白紙

明治三十五年十月
念日起筆

春城山人